

ポスト・コロニアル理論から見た インドネシアにおける文化民族主義 —民族的主体形成をめぐって—

北野 正徳

倉敷芸術科学大学非常勤講師

(2002年9月30日 受理)

はじめに

本稿は、ポスト・コロニアル理論の観点からインドネシアにおける文化民族主義を、その民族的（国民的：ナショナル）な主体形成のあり方に注目して論じるものである。インドネシアにおいては、多くの近代国民国家と同様に、民族主義に基づいて国民統合や国家建設が行われてきた。そして、インドネシアにおいて特徴的なことは、このような民族的主体形成の過程において、歴史観や共同体意識などの文化的側面から国民統合を進めるものとして、文化民族主義が重要な役割を担ってきたことである。

このような文化民族主義や民族的主体形成について、近年のポスト・コロニアル理論の展開は、興味深い視点を提供している[Ashcroft & Griffiths & Tiffin 1998]。ポスト・コロニアル理論は、従来のアジア・アフリカ地域研究に比して、文化民族主義や民族的主体形成といった事柄の両義性に注目していることが特徴的である。この両義性とは、「主体」(subject) という概念の両価性である。周知のように、この用語には、「主体」という意味と同時に「支配される」という意味もある。言い換えれば、文化面も含めて、国民（民族）国家建設の営みは、植民地主義的な「支配と従属」のなかでの民族的な「主体形成」の過程である。しかも、ポスト・コロニアル理論は、これら両面の関係が、植民地主義的な支配に抗して民族的な主体を打ち立てたというような単純なものではなく、もっと複雑に絡み合ったものであると注意を喚起している。そこで、本稿は、このような「支配・従属」と「主体形成」との関係が、インドネシアの文化民族主義においてどのように展開しているかを考察してゆきたい。

具体的には、本稿は、このような民族的主体形成の二面性が、これまでインドネシアでどのように理解・表現されてきたかに注目し、インドネシアにおける民族主義をめぐるいくつかの代表的な言説を紹介したい。そして、それらを、「主体形成」の能動性を強調したものと「支配・従属」の受動性と強調したものとに分類し、誰がどのような観点からそれぞれの立場を表明しているのかを分析したい。続いて、本稿は、インドネシアにおける民族主義をめぐる諸言説が、西欧人（研究者も含めて）の立場なども含めたより幅広いイデオロギー的背景のもとで構成されていることを確認してゆく。そして最後に、このような枠組みに対して近年のインドネシア知識人がどのように反応しているかを議論してゆきたい。

このような方法によって、本稿の議論は、インドネシアにおける文化民族主義についての理解と表現のあり方のいくつかのパターンを論じると同時に、それに対する近年のインドネシア知識人に特徴的な反応を分析することとなる。それを通じて、インドネシアにおける文化民族主義とポスト・コロニアル理論的な文化民族主義理解との交点を描くことを目指したい。では、続いて、ポスト・コロニアル論的な文化民族主義についての理解の枠組みについて概観することから、本論の議論を開始してゆきたい。

文化民族主義に関するモデル概念

前章で触れたように、ポスト・コロニアル理論は、文化民族主義と民族的主体形成において、現地人側の能動的な「主体形成」の側面と彼らの受動的な「支配・従属」の側面のふたつが絡み合っていることを指摘している。そして、このような民族的主体形成の両義性については、既になんらかのモデル概念も提示され普及しつつある。

まず、例えば、この理論の有名論客のひとりであるホミ・バーバ (Homi Bhaba) が提示した「ミミクリ」(mimicry) は、植民地主体(臣民)が支配者側の価値規範を模倣するなかで形成される民族的主体のあり方を説明する概念である[Bhaba 1994]。「ミミクリ」は、文字通りには「声帯模写」といった意味であるが、ここでは、職業獲得や社会昇進を求めて植民地臣民が支配者の価値規範を模倣追従することを意味している。しかし、彼らの模倣は、その不完全さ(例えば英語や仏語の発音の不完全さ)のためにしばしば滑稽で、その意味において支配者の価値規範に対する皮肉やパロディとなって表現される。そして、このように「従属(追従)」と「批判」が絡み合う過程のなかで、植民地臣民は自分たちの民族的な主体形成を経験してゆくとされている。このような意味内容とともに、バーバの「ミミクリ」は、文化民族主義の形成における「従属」と「主体形成」の関係を概念化している。

「ミミクリ」に加えて、もうひとつの例として、アプロプリエーション (appropriation) というモデル概念にも言及しておきたい[Ashcroft & Griffiths & Tiffin 1998 : 19-20]。この用語は、おおよそ資金などの「流用」を意味するが、ポスト・コロニアル論的な文脈では「奪用」とも訳されている。具体的には、「ミミクリ」と同様に、支配者(西欧)の価値規範を模倣追従しながら、その論理を逆手にとって(奪用して)、彼らの価値規範を批判する行為を意味している。そして、このような支配者に対する批判が被支配者側の民族的主体を導くものであると理解されている。このように、「奪用」という概念においても、民族的主体形成における西欧に対する追従と批判の重なり合いが強調されている。

本稿の主題から見れば、以上のように両義的な文化民族主義のモデル概念に関して、「支配・従属」としての受動的側面と支配者批判を通じた「主体形成」としての能動的側面のそれぞれが、現在までインドネシアの文化民族主義においてどのように理解・表現されてきたかが関心事になってくる。繰り返すが、ポスト・コロニアル理論においても、これらの両側面のどちらが強調されるかについては、事例、論者、観点などによって異なってくる。しかし、一般

的には、植民地臣民側からの能動的な主体形成の側面に対する共感、言い換えれば、「支配・従属」といった受動性のなかでの能動的主体形成をより積極的に評価する傾向がある。このことは、とりわけ、植民地臣民（アジア・アフリカの第三世界）側の論者の議論において見受けられる。では、このようなことがインドネシアの事例においてどのように現れているか、そして、それらがどのように解釈できるか続いて見てゆきたい。続く議論では、まず、民族的主体性の能動的側面を強調することが、インドネシアにおいてどのような言説となって誕生、展開そして定着してきたかを辿ってゆきたい。

インドネシアにおける文化民族主義（その1：能動性強調の事例）

インドネシアにおいては、冒頭でも触れたように、民族主義は一種の神聖な国民的理念となってきた。そして、とりわけ独立以降、民族主義の理念を様々な言説を通じて伝播・定着することが展開してきた。このような言説形成と伝播定着の過程は、広い意味で「文化的」な側面において、インドネシアの人びとに民族主義に基づく共通感覚、歴史観や価値観を定着させることになった。このようにして、広い意味での文化民族主義は、インドネシア民族（国民）国家の主体形成の基礎的概念になってきた。

このような歴史的背景から推測されるように、インドネシアにおいては、文化民族主義と民族的主体形成の能動的側面が専ら強調される傾向がある。このことは、もちろんアジア・アフリカの新興諸国と同様であるが、とりわけ独立後のインドネシアにおいては、その国史は、宗主国オランダの植民地主義的「支配」に対する「能動的抵抗」の歴史として構築・伝播され、その民族的主体形成の受動的側面は非常に単純化されてきた。その結果、インドネシア人自身が一般に理解・表現する文化民族主義は、ポスト・コロニアル理論的なモデル概念とは交差するようで交差していないような状態にある。では、このことがどのようなものか、インドネシア民族主義の歴史と重ね合わせながら続いて検討してゆきたい¹⁾。

インドネシアにおいて民族主義の先覚者と見なされうるような現地住民は、およそ19世紀の後半から世紀末にかけて誕生した。カルティニ（Kartini）に代表されるような西欧的・近代的価値規範を身に付けた少数のエリート現地住民は、まずは社会習慣や教育の西欧化・近代化を主張する社会階層としてこの時期から徐々に社会的な影響力を持つようになってきた。もっとも、彼らにおいては、ポスト・コロニアル理論が注目するような西欧と現地双方の社会のあいだの価値観の対立・緊張は一般に知覚されていない。総体的には、彼らは西欧近代の価値観に対する積極的な模倣を支持していたと言える。

彼らを第一世代とすると、1910年代を通じた展開が第二世代登場の時期である。20世紀に入って、第一世代のように西欧化した上流階層の現地住民が、ジャワ族、スダ族、華人、ユーラシアンといった各々の出自集団に従って次第に組織されるようになり、彼らは各々西欧近代的な価値規範に対する支持を表明している。一般に、この種の展開として最も特徴的な出来事として、1908年のジャワ族青年たちの社会組織であるブディ・ウトモ（Budi Utomo）の設立が、

インドネシア国史においてよく言及されている。もっとも、この時期において、これらの住民集団は一般的に、国民国家的統一概念としての「インドネシア民族」を明確に意識するにはまだ至っていなかった。

このような状況に変化が訪れたのは、1920年代の後半頃からである。この頃から、後の初代大統領スカルノ（Sukarno）率いるインドネシア国民党が提示したように、国民国家としての「インドネシア民族」という概念が都市のエリートを中心に形成・共有されるようになってきた。さらに、1928年には、各地からの青年社会組織の代表者たちが集った会議の場で、「ひとつの祖国 インドネシア、ひとつの国語 インドネシア語」という標語が採択された。一般に「青年の誓い」（sumpah pemuda）と呼ばれるこの出来事は、社会文化的統一体としてもインドネシア民族が知覚されたことの表れとされている。こうして、この時期にインドネシアにおける文化民族主義が、少なくとも都市のエリート層を中心に一通り確立したと言える。

続く1930年代から日本軍政期を挟んで独立に至るまで、政治運動という側面においては、インドネシア民族主義の展開は停滞した。スカルノたちの民族主義的政治運動は、彼らの検挙・流刑などのために、1930年代前半には既に事実上休止した。この状態は、日本軍政期まで継続し、この時期に民族主義活動家たちは日本軍への協力を通じて漸く政治活動を再開した程度である。その後、第二次世界大戦の終了とともに、スカルノとハッタを中心にインドネシアの独立が宣言されて、国家統一体として民族的な主体形成が公表されるに至った。そして、オランダとの独立闘争を経て、1950年を迎える頃には、インドネシア共和国として、民族国家の独立が国際社会にも公認されるようになった。

独立以降の文化民族主義は、インドネシア人自身がその意味内容と表現様式（言説）の構築・伝播を担うようになった結果、現在まで一貫した展開を示している。そこでは、いずれの政権の時代においても、民族主義の理念の神聖化と民族的主体形成の能動的側面の強調が見られる。なかでも、民族国家の独立に至る近代史は、オランダ植民地主義に対する抵抗と民族的主体の確立の歴史として規定され、このような歴史観が幼児教育から公務員研修に至るあらゆる社会分野で伝播された。そして、このような能動的側面の強調は、スカルノ時代から現在に至るまで、基本的には変わりなく継続している。インドネシア人自身は、文化民族主義を、このように能動的な活動の集積であると理解・伝播してきたとすることができる。

実際には、このような能動的側面の強調は一種の神話化であり、逆説的には、この神話化こそが文化的な意味で民族主義の定着に寄与してきたと言える。なぜなら、独立以前の「運動」は、基本的には関係集団の範囲に限られ全国規模ではなかった。同様に、国家の政治経済的枠組みに関して言えば、スカルノ、スハルト、そしてスハルト以降のいずれの時代を通じても、国家建設は一貫した成功を収めていない。従って、逆説的な表現ではあるが、インドネシアにおける文化民族主義は、実際には失敗に満ちた国家建設の実態を隠蔽してその理念を称揚するものとして機能してきたと見ることができる。

そのために、ポスト・コロニアル理論が強調しているような、民族的主体の形成における受

動性がインドネシアにおける民族主義的諸言説において明確に（深刻に）意識されてきたかどうかは疑わしい。当然、植民地時代の一部の西欧化した現地知識人たちが西欧と現地のふたつの価値体系のあいだの矛盾と緊張に身を置いたことは十分に推測できる²⁾。しかし、このような両義的経験は、基本的には個人や家族レベルのもので、共同体や国家全体を包括する経験ではなかったようである。先に触れた個々の「運動」や「国家建設」の営みを見る限り、少なくとも、共同体・社会・国家レベルにおいては、民族的主体の能動的側面がナイーブに称揚され続けてきたと言うほうが穏当である。

そして、このような背景のもとでは、ポスト・コロニアル理論的な文化民族主義のモデル概念も、独立後のインドネシア人の側の見地から理解されるようになってきている。本稿では、その典型例として、1913年の政治的事件とポスト・コロニアル論的な「奪用」の概念との関係を挙げてみよう。この事件は、一般に「原住民委員会事件」と呼ばれ、独立以前の「民族運動史」の輝ける一頁としてこれまで称揚されてきた。この事件は、オランダのナポレオン支配からの解放百周年を記念した式典に合わせて、ジャワ人青年のスワルディ・スルヤニングラット (Suwardi Suryaningrat) がこの式典の趣旨をオランダ語で風刺批判したもので、オランダがナポレオンから解放されたのと同様にインドネシア（当時はオランダ領東インド）もオランダからの独立が可能であると示唆するものだった。彼の批判の内容はともかく、スワルディの批判の要点は、オランダ側の論理を逆手にとって原住民の彼がオランダ語で批判したという点で優れて「奪用」的な行為であると評価されている³⁾。

ここで興味深いことは、スワルディの言論が確かに「奪用」の例であるとしても、彼の能動的抵抗がどのような受動的側面と交錯していたかについてインドネシア人一般（実際には西欧人も含めて）が無関心であることである。実際には、植民地エリートである彼が西欧近代的規範に順応してゆくことは、政治的側面のみならず、社会文化的側面でも同胞たちと乖離することを意味するはずである。また、彼の政治思想は西欧近代からの借り物であり、その撰取と使用のなかでは、現地の社会文化的価値との軋轢が発生していたはずである。そして、これらの事柄と彼のオランダ批判との関係を検討することこそ、民族的主体形成における能動・受動の両側面を見ることになると言えるが、このような観点は、インドネシア人自身が構築・伝播してきた「国史」からは一般に欠落している。このような意味で、ポスト・コロニアル理論が注意を喚起してきたような文化民族主義の両義性は、インドネシア人自身にはいささか縁遠いものとなってきた。では、このような状況に対して、近年になってどのような知覚や言説が展開するようになってきたか、続いて検討してゆきたい。

インドネシアにおける文化民族主義（その2：受動的側面への関心）

1990年代に入って以降、ポスト・コロニアル理論のアジア諸国への移入とともに、インドネシアにおいても、まだ比較的少数の文化系知識人のあいだではあるが、文化民族主義における「支配・従属」としての受動的側面に対する関心が向けられるようになってきた。そして、そ

ここでは、ポスト・コロニアル理論の視座のもとで、インドネシアにおける民族的主体形成に潜在してきた植民地主義的な性格に対する関心も向けられるようになっている。

このような新しい展開の思想的背景としては、サイード (Said) に代表される英語圏での一連のポスト・コロニアル研究の成果がある。とりわけ、サイードが表明した「オリエンタリズム (orientalism)」の概念は、1990年代のインドネシアの文化人たちにも影響を与えるようになっている [サイード1993]。サイードの「オリエンタリズム」は、西欧近代がどのように東洋 (植民地) の諸属性を規定し、その諸属性に従って現地住民が近代的なアイデンティティー形成を行ってきたかを明らかにしているが、このことは、インドネシアも含めて、東洋における近代的な民族的主体形成は、そもそも西欧近代の規定した現地社会像に従っている (「支配」されている) ことを意味している。このような理論的背景のもとで、近代国民国家的な民族的主体形成に組み込まれている西欧近代の「支配」が、この時期、インドネシアの知識人層にも強く意識されるようになったと言える。

例えば、文芸批評家のニルワン・デワント (Nirwan Dewanto) は、1990年代前半において、「私たちのポスト・コロニアルな状況は、私たちがオリエンタリズムの影のなかで生きていることである」と発言している [Dewanto 1994 : 7]。彼の発言は、既に半世紀近くにわたって称揚され続けてきたインドネシア民族主義の思想的枠組みが西欧のオリエンタリズムの構築物に過ぎないということに対する痛ましい自覚を表現している。従来のインドネシアにおける民族主義的諸言説においては、前章で見てきたように、「ミミクリ」や「奪用」といった概念における現地住民側の能動的主体形成を称揚することが圧倒的に優勢であったが、こうして、1990年代に入る頃から、同じ文化的営為についてその受動的側面により注目する立場も現れてきた。彼らは、従来のような能動性称揚は、植民地主義者 (西欧) によって規定された民族的アイデンティティーに対する一種の自己陶醉や自己欺瞞であると考えられるようになったと言える。こうして、1990年代に入って、半世紀にわたって続いてきたインドネシアの文化民族主義の理念に対して、インドネシア人自身が自己批判的な知覚を明らかにするようになった。

では、このような新しい思潮の登場も確認したうえで、ここからさらに、民族的主体形成におけるこのような能動・受動の両側面に対する理解表明のあり方が、インドネシアに特徴的な背景とどのように関係しているかを見てゆきたい。それを通じて、ポスト・コロニアル論的な観点とインドネシア人がこれまで理解・表現してきた文化民族主義 (民族的主体形成) とがどのように接合しているかを検討することが次章の課題である。

イデオロギー的背景

まず、これまで主に民族的主体形成における能動的側面が強調されてきたことから見てみよう。このこと背景には、インドネシア人と西欧人 (とりわけインドネシア研究者たち) のそれぞれの立場 (イデオロギー) が反映されているようである。

インドネシア人側にとっては、既に触れたように、国民統合や国家建設といった実務的課題

を遂行するために、民族的主体形成の能動的側面を強調することが不可欠だったと言える。インドネシアは、独立宣言後も、独立戦争、イスラム分離主義運動、国軍と共産党との対立などの国家統一の危機を経験してきた。このような背景においては、共同体意識の高揚という文化的政策を通じて国家統一を維持することが必要不可欠であるため、民族的主体の能動的側面を強調する諸言説が優勢になってきたと考えられる。そして、この時期に続くスハルト体制時代（1966-1998年）において、国家主権や国民統合などの課題は一通り実現することになった。しかし、彼の時代において、大統領を中心にして経済開発をめぐる利権政治が浸透するとともに、文化民族主義は、形骸化する一方で、利権政治の内実を糊塗するものとして、表面的には様々な言説を通して称揚され続けた。スハルト時代から現在に至るまで、このようなかたちで、文化民族主義の能動的側面を強調することがインドネシア人側の諸言説には見られる。このように、スハルト時代の爛熟を契機にニュアンスには変化が生じたが、民族的主体形成の能動的側面は、独立後半世紀以上にわたってインドネシア人によって称揚され続けている。

次に、西欧人、とりわけ研究者の立場は、基本的にはインドネシア民族国家建設を好意的に理解しようとする立場を持っていた。とりわけ、1980年代に入る頃までに公刊されたいくつかの歴史記述は、「権威的」著作として現在なお影響力を持っている⁴¹。彼ら西欧人（研究者）たちは、基本的には、広義のリベラリズム（良識主義）に基づき、西欧植民地主義に対する一定の批判とインドネシアにおける民族的主体形成（端的には独立国家建設）に対する共感を向けている。彼らは、当然、スハルト体制には批判的であるが、その批判性が図らずも彼らが抱くインドネシア民族主義に対するリベラルな期待を表明している。このような背景のもとで、西欧人たちの描くインドネシア民族主義のイメージも、現在に至るまで民族的主体の能動的側面を下支えしてきたと言える。

このような総体的傾向に対して、前章で紹介したような、民族的主体形成における受動的側面を指摘する論者は次のように反応している。まず、インドネシア人の側に対して、前章で取り上げた批評家デワントは、ポスト・コロニアル論的な観点を援用して、インドネシアの文化民族主義は権力者たちの道具と化したと批判している [Dewanto 1994:8]。具体的には、彼は、スハルト体制は自国の資産や資源に対して植民地主義的な利権政治を行う一方で文化民族主義を称揚することでその事実を隠蔽していると批判している。彼自身は、民族主義それ自体に対する原則的賛否を表明していないが、少なくとも1990年代のインドネシアにおける文化民族主義が、国民に対する植民地主義的な支配と抑圧の機構に変容したと見ていることは確かである。続いて、西欧近代（研究者も含めて）に対しては、前章でも紹介したように、デワントのような論者は、西欧近代が東洋の原住民にもたらした近代的価値観は、（文化）民族主義も含めて、「オリエンタリズム」的支配であると批判している [Dewanto 1994:7]。具体的には、彼は、西欧人のインドネシア民族主義に対するリベラルな期待は、西欧人の価値観のナイーブな表明であるというような意味でオリエンタリズム的（究極的には植民地主義的）であると見ている。このように、ポスト・コロニアル理論と民族的主体形成の受動的側面との結びつきを重視する

評者の観点からは、従来のインドネシア民族主義に対する好意的理解とは対照的な意見が表明されている。

以上のことを、そのイデオロギー的背景に従って要約すると次のようになる。インドネシアにおいては、少なくともスハルト時代の途中まで、インドネシア人と西欧人（研究者）の双方にとって、民族主義や国民国家といった理念は積極的に理解されていた。インドネシア人にとっては実務的な課題として、また、西欧人（研究者）にとっては彼らのリベラルな政治態度の投影対象として、民族的主体形成に期待が向けられていた。こうして、彼ら双方は、民族的主体形成における能動的側面を強調してきた。そして、奇しくも、このことが、例えば「奪用」の例に見えるように（前々章参照）、近年のポスト・コロニアル論的な文化民族主義のモデル概念のある側面と通じ合っていた。しかし、スハルト政権の爛熟とともに、従来の国民国家建設の諸政策を「抑圧と支配」と理解する立場の発言も次第に現れるようになり、そこでは民族的主体形成における受動的側面が強調されるようになってきた。彼らは、従来の国民国家建設におけるインドネシア人側の自己欺瞞と西欧人側のリベラルな期待に対する批判を展開させている。そして、このような受動的側面の強調も、ポスト・コロニアル論的な文化民族主義のモデル概念の別の側面に相通じている。こうして、これらふたつのイデオロギー的立場が互いに言論の場であらうようになってくるとともに、現在インドネシアにおいて、同じようにポスト・コロニアル論的な観点から見て、民族的主体形成に関して対照的・両義的な評価が並存するようになってきている。言い換えれば、1990年代において、インドネシア人自身の文化民族主義に対する理解が、ポスト・コロニアル理論が提示してきた民族的主体形成についてのモデル概念を十分に捉えるようになってきていると言える。なかでも、その受動的側面を強調する立場は、国家建設に関するインドネシア人自身の失敗と西欧人（研究者）たちのリベラルな期待の双方を、植民地時代的状况と相通じるものとして批判していることに特徴がある。現在まだ少数派であるが、このような立場が近年現れてきたことは、ポスト・スハルト時代のインドネシアの文化的世論形成において注目されることであると言える。

おわりに

本稿は、ポスト・コロニアル理論が提示する（文化）民族主義に関する理解のいくつかのモデルを、インドネシアでの事例に照らし合わせて検討してきた。インドネシアにおいては、文化民族主義とそれに由来する民族的主体形成について、インドネシア人と西欧人（研究者）双方の立場から、これまでその能動的側面を強調するような理解が優勢だった。しかし、1990年代に入って、ポスト・コロニアル理論の本格的移入の影響もあり、インドネシア人自身の側から、民族的主体形成における受動的側面を指摘する立場も登場してきた。そこでは、国民国家建設におけるインドネシア側の失敗に対する深刻な反省と、西欧人（研究者）たちがインドネシア民族主義に従来向けてきたリベラルな政治的期待に対する批判が現れている。そして、これらのことを一種の植民地的状況として批判すると言う意味で、1990年代に現れきたこの新し

い展開は、ポスト・コロニアル論的な観点から見て興味深い社会文化状況であるだけでなく、これまでの民族主義を思想的にどう模索し直して再構築してゆくかというスハルト以降のインドネシアの国家的（国民的）課題としても、これからも注目されるものである。

脚注

- 1) 以下のインドネシア民族主義の歴史についての記述の多くは、池端（編）[1999]、永積[1980]に基づいている。
- 2) オランダ時代の現地知識人のこのような経験については Foulcher [1995] の冒頭部を参照できる。
- 3) スワルデイの「奪用」についての積極的な評価は、永積[1980: 144-147]、アンダーソン[1997:192-194]などに例を見ることができる。
- 4) その例として Anderson [1972], Kahin [1952] などがある。

参考文献

- アンダーソン, ベネディクト. 1997. 『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆 訳）東京：NTT出版.
- Anderson, Benedict. 1972. *Java in a Time of Revolution*. Ithaca : Cornell University Press.
- Ashcroft, B., Griffiths, G. and Tiffin, H. 1998. *Key Concepts in Post-Colonial Studies*. London: Routledge.
- Bhaba, H.K. 1994. *The Location of Culture*. London : Routledge.
- Dewanto, Nirwan. 1994. Carut-marut yang Bikin Kagum dan Cemas. In *Kalam Edisi 1*: 4-11.
- Foulcher, Keith. 1995. In Search of the Postcolonial in Indonesian Literature. In *Sojourn* Vol. 10 No.12 : 147-171.
- 池端雪浦（編）. 1999. 『新版 世界各国史 6 東南アジア史II 島嶼部』東京：山川出版社.
- Kahin, George McT. 1952. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.
- 永積昭. 1980. 『インドネシア民族意識の形成』東京：東京大学出版会.
- サイード, エドワードW. 1993. 『オリエンタリズム 上・下』（板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳）東京：平凡社.

Cultural Nationalism in Indonesia in the Perspective of Post-Colonial Theory: Some Comments on the (Post-) Colonial Subject in Indonesian Context

Masanori KITANO

*Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 30, 2002)*

This article examines the development of cultural nationalism in post-independence Indonesia from the perspective of post-colonial theory.

Post-colonial studies often stress the ambivalent nature of cultural nationalism in post-colonial countries where the (post-)colonial subject is formed in the interaction of national(ist) awakening and colonial subjection. As such, the (post-)colonial subject necessarily has both active and passive aspects.

By contrast, there was an overall neglect of such a passive aspect of the (post-)colonial subject in the Indonesian cultural discourse. This was mainly because of a long-prevalent nationalist myth in Indonesian society since the independence. This was also because of the framework of the Indonesian historiography up until the 1980s, which was established mainly by western researchers and basically characterised by sympathy with Indonesian nationalism.

However, a number of Indonesian intellectuals have started to discuss the above passive aspect in Indonesian nationalism since around the 1990s. This new trend represents, politically, their critical response to Suharto regime's failure in nation building and also, theoretically, their in-depth and critical understanding of cultural nationalism in the perspective of post-colonial theory.

In this perspective, this new critical trend suggests the possibility of bringing a theoretical contribution to the restructuring of nationalism, one of the most urgent national problems of post-Suharto Indonesia.